

公開講演会記録

ゴジラと満洲——日中関係の なかからゴジラをとらえなおす

北京日本学術交流会責任者 山口直樹（会員）



はじめに

ゴジラの誕生から70年を迎えようとしている。その70周年を記念した映画、『ゴジラー1.0』^{マイナスワン}が、日本でもアメリカでもイギリスでも大ヒットしている。ゴジラは、ただ一過性の流行に終わることはなかった。

『シン・ゴジラ』（2016）にしても『ゴジラー1.0』（2023）にせよ新奇な怪獣を次々に登場させるのではなく、ゴジラと人類の攻防に焦点を絞ったことが人間ドラマと特撮部分との有機的な結合をもたらし、映画を完成度

の高いものになっている。怪獣映画は、ただ新奇な怪獣を出せばよいというものではないことがわかる事例である。

1990年代の半ば、本格的なゴジラ研究は、まだ始まったばかりだった。この頃の先行研究は、佐藤健志『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（文藝春秋、1992）と高橋敏夫『ゴジラが来る夜に』（廣済堂出版、1993）ぐらいしかなかった。しかし、その後30年でゴジラ研究は大きく進展した。大学の紀要や書籍などにおびただしいゴジラ論が書かれており、ゴジラ研究ルネサンスといった状況を迎えている。またゴジラや円谷英二を博士論文

のテーマにする若手研究者もあらわれてきている。

そのような状況のなかで本稿の意義はどこにあるのか。

まず、現代のゴジラ研究には日中関係のなかからゴジラを考察しようとしたものが、ほとんどない。日本語文献でゴジラの中国語表記「哥斯拉」に言及しているものは、私の知る限り、ましてこ・ひでのり『ゴジラ論ノート——怪獣の知識社会学』（三元社、2015）ぐらいしかない。これはどうしたことだろうか。

そこで本稿では北京に長期滞在した者として日中関係のなかからゴジラを

とらえなおすことを試みた。まず、第一に日米関係のなかだけでなく日中関係のなかでゴジラをとらえることによってゴジラの意味がより十分に明瞭になることを主張したい。

第二に、筆者の専門とする科学史サイドからのゴジラ論もほとんど書かれてはいないことを考慮に入れ、植民地科学史をふくめた科学史サイドからのゴジラ論を提出したいと考えた。

1. 現代中国で知られていなかったゴジラ

1-1. ゴジラとは何か

ゴジラとは、人間が近代科学によって自然を支配し、完全に制御できたと思った瞬間に、自然が、人間の科学文明に反逆を開始するという物語にかかわるなにかである。

また、ゴジラは、日本のマグロ漁船、第五福竜丸がアメリカの水爆実験によって被曝したという事実に基づいて着想された現代の怪獣である。

そのゴジラが、現代中国で知られて

いないことを知ったのは、2004年北京大學でその日本語学科の大学生から「ゴジラって何ですか」と聞かれたときであった。彼らは「ウルトラマン」や「鉄腕アトム」や「ドラえもん」や「名探偵コナン」はよく知っていたが、ゴジラは知らなかったのである。ちなみに台湾や韓国の欧米の留学生たちは、ゴジラをよく知っていた。

だが、中国の学生だけは、ゴジラや第五福竜丸を全く知らないということがわかってきたのである。このことへの疑問が、本稿の出発点になっている。

1-2. “北京ゴジラ行脚”の誕生

2004年、北京大學日本語学科の先生から「山口さん、日本文化紹介を北京大学生にしてくれませんか」と頼まれたことがある。

そこで『ゴジラ』（1954）の映像を交えて北京大学生にゴジラ講義を行うことにした。ここから北京の大学に出前授業を行う“北京ゴジラ行脚”が始まった。

北京大學をはじめとした中央財經大

学、中国伝媒大学、北京林業大学、中国人民大学など北京の大学の日本語学科や民間日本語学校の学生を対象に無償でゴジラ出前授業を行い、学生に感想を書いてもらうという試みである。

中国でゴジラが知られるようになったのはごく最近のことである。特に2020年代ハリウッド版『ゴジラvsキング』（2021）が中国でヒットし、知名度は一気に上がった。

ただ、このためゴジラをアメリカのものだと考えている中国人も少なくない。

2. 東宝という映画会社の誕生

2-1. P・C・L（写真化学研究所）から東宝映画株式会社へ

まず、ゴジラ誕生の基礎となった東宝という映画会社について簡単に見てみることにしよう。

東宝という映画会社は、まずP・C・L（写真化学研究所）を、源流として成立した。P・C・Lは、1931年に丸ビルに発足し、その後、成城に移転する。この写真化学研究所は、理化

学研究所に勤務していた植村泰二と同じく理化学研究所に在籍しながら松竹キネマで現像部長をつとめた増谷隣らにより設立されたものである。植村泰二は、理化学研究所には、写真乳剤の研究者として勤務していた。この成城への移転は、自宅が駒込にあった植村泰二が、娘の泰子が成城小学校（1930年入学）に通っており、自宅からの通学が大変だったことから、1932年に仕事場のP・C・Lが成城に移転される。その後、関連四社を併合して1937年から東宝映画株式会社と



北京ゴジラ行脚でゴジラ講義のあと北京の民間日本語学校
いらっしゃい日本語学校で中国人青年たちと（2014年）

なる。植村泰二は、研究者であるとともに経営者でもあった。東宝とは、東京宝塚の略称である。

2.2. 東宝と中国と軍

P・C・L（写真化学研究所）という名前が示す如く、写真化学という基礎的な学問の発展がなければ、娯楽産業としての映画産業の発展もなかったと言える。ここには後にソニーを起業することになる井深大氏もいた。写真化学と関係の深い特撮技術では、他の映画会社に対して東宝が、頭一つ抜きん出た存在だった。と同時に東宝は、当時、軍と最も近い映画会社であった。だから日中戦争のはじまりの1937年に活動を開始した東宝と中国のかかわりには深いものがある。

1937年、東宝は、ドイツと合作で『新しき土』という日独合作映画を製作している。

「新しき土」とは端的に言って「満洲国」のことであった。この映画の特撮を担当したのは、のちに『ゴジラ』（1954）で特撮を担当することに

なる円谷英二であった。

そして東宝のある成城は、日本のビバリーヒルズといわれる日本初の学園都市にして映画の街となった。現在は、多数の文化人、芸能人、映画人が住む高級住宅地になっている。

3. 戦争の記憶としての「ゴジラ

—「ゴジラ映画から消される中国

3-1. 複合的な戦争の記憶

川本三郎は、『今ひとたびの戦後日本映画』（中公文庫、2000）の「ゴジラはなぜ「暗い」のか」において以下のように述べた。

「ゴジラは「戦災映画」、「戦禍映画」である以上に、第二次世界大戦で死んでいった死者、とりわけ海で死んでいった兵士たちへの鎮魂歌ではないのかと思いたる。『海に消えていった』ゴジラは、戦没兵士たちの象徴ではないのか」（85頁）。

ゴジラが、「戦争の記憶」である以上、この解釈がスタンダードなものになっているのには根拠があるだろう。

たださらなる問題は、かつての日本の戦争が、対アメリカの戦争であるとともに対中国、正確に言えば、対中華民國の戦争という複合的な性格を持つ戦争だったということにある。

3-2. ゴジラ映画から消された中国表象

猪俣賢治は、「南洋史観とゴジラ映画史―皇国日本の幻想地理学と福永武彦のインファント島」(新潟大学人文学部紀要『人文科学研究』、2008)において「ゴジラ映画全28作と『モスラ』など、戦後の特撮怪獣映画には、「南の島」は数多く登場するのだが、その一方で(日本以外の)「東洋」あるいは「中国」が殆ど描かれていない、ということに気付く」(99頁)という指摘を行っている。これは重要な指摘であろう。ここでは『ゴジラ』(1954)における台本の人物設定の変化を例としてみてみる。

『ゴジラ』(1954)における台本の変化は以下のようになっている。

検討用台本「G作品」、香山滋↓準備稿「G作品」、村田武雄、本多猪四郎↓最終決定稿「ゴジラ」村田武雄、本多猪四郎↓完成作品「ゴジラ」監督・本多猪四郎、特撮監督・円谷英二。

では、検討用台本G作品(香山滋)における芹沢大助の人物設定はどうなっているだろうか。

「年齢40歳、元北京大学教授、薬物化学者で山根恭平とは親交が深い。嘗て、大学の休暇を利用して熱河省へ山根が化石採掘に行ったとき、助手として同伴。狼におそわれた危い間際を山根恭平に救われたので山根を命の恩人と思っている。その際、片目を失い、顔半面ひどい傷のヒツリで醜い。妻は数年前病死、ひそかに恵美子を慕っているがあきらめている。恵美子もそれはうすうす知っている。「今度は空中酸素破壊剤を完成させてみせる」という」人物設定になっている。

これが「G作品」準備稿、村田武雄、本多猪四郎になるとどう変化するか。

「年齢30歳、薬物科学者。山根博士に愛され、密かに恵美子を思っているが、戦争で片目を失い顔面に鋭い傷をおっている」となり元北京大学教授と

いう設定は消えている。

検討用台本G作品(香山滋)の山根恭平の人物設定は以下のようなものだった。

「年齢55歳。元北京大学教授。東京湾にほど近い高台に居を構える。あまり豊かではない。研究のことになると気狂いになるほどの偏執狂。娘の恵美子には、世間並みの父親」。それが「G作品」準備稿、村田武雄、本多猪四郎になると以下のように変化する。

「ゴジラが水爆によって生まれたことを公表することで世界が混乱することを恐れる。神経痛の持病のため大戸島に調査にはいかず。年齢55歳。古生物学の権威」。この後、神経痛で大戸島の調査に参加しないという記述はなくなる。「変わり者の科学者」から「庶民的な科学者」に性格を変えている。そしてここでも元北京大学教授という設定は消えている。

つまり、芹沢大助と山根恭平という科学者の設定から元北京大学教授という設定が消え、中国との関係が消し去られたということがわかる。原作の香山

滋が、古生物学者の山根恭平を元北京大学教授としたのは、北京原人の化石の発見を北京大学の教授が行っていたことが念頭にあっただろうし、化学者の芹沢大助を元北京大学の教授としたのは、芹沢と731部隊とのかかわりを念頭に置いていた可能性があるだろう（以上の記述は『初代ゴジラ研究読本』（洋泉社、2014）166～167頁を参照した）。

4. ゴジラと植民地科学史

4-1. 「満洲国」における恐竜研究

1945年以前における日本人地質古生物学者の恐竜体験には、1934年、樺太の川上炭坑地内から発見された「日本竜」が有名だが、これに続くものとして「満洲国」の恐竜はあった。日本竜の研究にたずさわった北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室創設教授・長尾巧は、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室創設教授・矢部長克の門下であり、「満洲国」の恐竜研究も矢部一門の遠藤隆次、野田光雄、

鹿間時夫らによって進められている。満洲国立中央博物館の研究などで知られる犬塚康博は「ゴジラ起源考」『千葉大学人文社会科学』（第33号、2016）という論稿のなかで「1930年代から1940年代前半は、日本の地質学、古生物学における恐竜研究の高度成長期だったのである」（46頁）と指摘している。確かにこの時期は、地質古生物学方面で大きな発見が、相次いでいたと言えそうである。その一つが三葉虫の発見という出来事であった。

4-2. 三葉虫との関連で浮かび上がる古生物学者

遠藤隆次と「満洲国」との関連を示してあまりあるのが三葉虫である。1954年以前、1930年代および1940年代における日本人地質古生物学者で、古生代研究、三葉虫研究の第一人者のひとりに遠藤隆次がいた。三葉虫は、『ゴジラ』（1954）においても英語名の「トリロバイト」として登場している。

1892年生まれの遠藤は、192

4年に東北帝国大学理学部地質学古生物学教室を卒業すると、「満洲」にわたって南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）設立の撫順中学校教諭となり、後20余年におよぶ満洲・中国生活を開始する。1927年に満洲教育専門学校教授、1929年4月から1931年6月までのスミソニアン・インスティテュション留学をはさんで、1933年には満鉄教育研究所教授となる。そして1939年、満洲国立中央博物館（新京）学芸員となる。

遠藤は「満洲国」終焉まで同館自然科学部長の地位にあり、敗戦後は1946年8月から1948年6月まで留用されて奉天の東北大学教授をつとめたのち、引き揚げている。

遠藤の満洲古生代研究は、満鉄に所属した時代に集中して行われた。引き揚げ後は、1954年から埼玉大学学長として学術行政にかかわった。

『ゴジラ』（1954）の山根博士は、古生物学者、遠藤隆次をモデルにしていた可能性もある。原作の探偵作家、香山滋は、地質学、古生物学に詳しい。

おそらく遠藤隆次のことは知っていただろう。『ゴジラ』における三葉虫や恐竜の化石は、日本の満洲植民地科学研究の「成果」の一つとみなすことも不可能ではないだろう。このように「満洲国」における恐竜研究は、東北帝国大学出身の古生物学者らによって行われていたということがわかる。

4-4. なぜゴジラ映画から中国表象が消し去られたのか

なぜゴジラ映画には南洋諸島（ただし沖繩は除く）は多く出てくるのに中国が出てこないのか。

これまでの考察からわかることは、中国を登場させると植民地支配の過去や軍事的、地政学的な説明をしなければならなくなることや、戦後日本における（中国を対象とした）植民地主義の忘却という事態を反映しているということが考えられるであろう。

ゴジラが、日本海側からではなく太平洋側からあらわれるというのは、ゴジラ映画の基本的な約束事である。また『シン・ゴジラ』を除いてゴジラ映

画には、在日米軍は登場しない。

これも中国を意識した軍事的、地政学的配慮だとも考えられる。

そして現代中国においてゴジラ映画は、反核の理念を持つがゆえに民衆には、公開されずにきたと考えられる。

5. 現代中国における第五福竜丸の記憶の忘却

5-1. 「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた」と述べた周恩来
ゴジラとともに第五福竜丸も現代中国では、ほとんど知られていない。1954年に周恩来は、第五福竜丸の被曝に関して「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた」と批判したことがある。

周恩来は、このとき、中国人民は、日本に沸き起こった反米の世論と連帯すべきと考えた。多くの中国人は、その時点では第五福竜丸を認識していたが、その後、忘却されていくことになる。また第五福竜丸の被曝によって盛り上がった日本における反米の世論は、その後ま

もなくして沈静化していくことになる。それは、正力松太郎が主導した日本テレビ放送網や『読売新聞』を中心とした新聞（他の新聞もこのキャンペーンには便乗していた）による「夢のエネルギーとしての原子力の平和利用」キャンペーンが、功を奏したからであった。これは、「3・11」以降、日本の市民が常識としなければならないことである。

5-2. 第五福竜丸と「満洲国」のつながり

第五福竜丸が、日本において忘却の危機に曝されていたとき、それを救ったのは、「満洲国」からの引き揚げ者であった。

「満洲国」から引き揚げてきた武藤宏一氏が、1968年3月10日、『朝日新聞』の声欄に第五福竜丸を保存するべきだという投書を行い大きな反響を呼んだのである。この投書がなければ、第五福竜丸は、人々の記憶から消え、第五福竜丸記念展示館も存在しなかったかもしれない。なお「満洲国」建国は1932年3月1日であり、ちょ

うどその22年後に第五福竜丸はアメリカの水爆実験で被曝した。

この武藤氏は、40歳の若さで亡くなってしまう。満洲引き揚げも特権を持っていた政治家や官僚とは対極的な引き揚げであり、母一人、子一人の家庭で育ったという。

6. 『ゴジラ』（1954）スタッフや俳優陣と中国あるいは「満洲国」とのつながり

6-1. 本多猪四郎監督と中国

監督の本多猪四郎は、1911年に山形県朝日町の寺に生まれている。何度も戦争に日本兵士として動員され、約8年にわたって中国大陆にいた。「満洲国」にも行っていた。海外での知名度、評価が高いが、中国では知られていない。

『子どもの科学』を読んで育つような科学少年だった。『ゴジラ』（1954）の科学者、芹沢大助の科学観は、監督の本多猪四郎のものと見てよい。2010年代のゴジラ映画に芹沢猪四

郎という科学者が出てくるのは象徴的である。

監督デビューはおくれるが『ゴジラ』（1954）でその戦争経験が生きている。怪獣映画における逃げる民衆の姿は、本多監督が、中国大陆で目撃した中国民衆を反映していると考えることができる。

6-2. 俳優・宝田明と中国

宝田明氏は1934年に北朝鮮の新義州で生まれ、1歳で「満洲国」のハルピンに移り、そこで育つ。父・宝田清は、満鉄の技術者だった。ハルピンでソ連兵に撃たれたり、大変な苦勞をして新潟県村上市に引き揚げている。青年時代のあだ名は、「大陸」であった。

『ゴジラ』では戦後を代表するような快活な青年、尾形を演じている。役の上では山根博士の娘、山根恵美子（河内桃子）とは恋仲である。尾形は、ゴジラを殺すことを主張するが、試写会では、溶けていくゴジラを見て泣いたという。俳優・宝田明と人間・宝田



王子の宝田明事務所（2013年8月）

明は区別しなければならない。

俳優・宝田明は戦後の快活な青年尾形を演じ「ゴジラがあらわれた、ゴジラを殺せ」と映画のなかでは主張した。しかし、実際の人間・宝田明は、戦前の「満洲国」におけるソ連軍の占領経験や「満洲国」からの引き揚げ経験をひきずっており、「ゴジラがあらわれた、ゴジラを殺せ」ではなく「ゴジラがあらわれた、人間が変われ」と説く人である。

6-3. もつひろりの「ゴジラ同期生」

宝田明氏と同様のゴジラ同期生とし



第五福竜丸記念展示館近くの居酒屋で第五福竜丸元乗組員の太石又七氏と（2005年6月）

て、第五福竜丸元乗組員・太石又七氏をあげることができる。

1934年静岡焼津生まれで、20歳で第五福竜丸に乗りビキニ環礁のアメリカによる水爆実験で被曝し、周囲の妬みに耐えかねて東京の匿名性の高い街のなかに逃げ込んでいた。最初はマスコミ嫌いの人だったが、1980年代前半から社会的発言を始め、本を4、5冊も書き上げている。

ビキニ環礁で同じ「死の灰」を背負ったからかゴジラに対する共感はず尋常でないものがあった。私は、占領史家の笹本征男氏経由で太石氏と知り合いに

なった。

7. 本多怪獣映画の特徴

7-1. 思想性の高い怪獣映画『ゴジラ』（1954）

空想科学映画と呼ばれる映画や怪獣映画はたくさんあるが、本多作品にしか見られない大きな特徴が存在する。通常の怪獣映画では、怪獣と人間社会との間で物語が展開していく。ところが本多作品においては、怪獣と人間社会以外に科学者が登場し、必ずと言っていいほど重要な役割を演じているのだ。

私が、注目したいのは、『ゴジラ』（1954）では、科学者による最終兵器オキシジェン・デストロイヤーの使用についての倫理をめぐる非常に思想性の高い物語になってしまったという点である。『ゴジラ』（1954）とは、科学者論を見ているものに思考させる物語でもあったのだ。

芹沢博士は最先端の科学者でありながら、現代科学に不信を抱き、みずからをふくめて人間というものを信用し

ていない、いわば闇の科学者である。この芹沢博士の背負う闇はゴジラの闇とほぼ同質の闇である。ゴジラを葬り去ったのが、当時華々しく登場した「防衛隊」（のちの自衛隊）ではなく、このゴジラと同じ闇を背負う芹沢博士であったことは、非常に意味深いことであった。

7-2. 戦後民主主義の科学観と『ゴジラ』（1954）における科学観

佐藤健志は、『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（文藝春秋、1992）において『ゴジラ』（1954）を戦後民主主義の世界観で描かれた作品であるとし、その破綻を揶揄してみせる。だが、たとえば『ゴジラ』（1954）に登場する科学者、芹沢大助の科学観は、戦後民主主義の科学観とは大きく異なっている。

日本は「科学戦に敗れた」のであるから、さらなる科学振興が必要であると考え、科学技術の振興や開発にだけは、原子爆弾の開発もふくめて疑問が出されることはなかった。

科学技術については、政治的な立場を問わず、階級的な位置も問わず、その進歩について異を唱える者は、誰一人いないという状況が、戦後啓蒙期といわれる時代に生まれていた。

戦後民主主義の科学観とは、自然科学の研究を絶対的な善と見て「何をにおいても科学研究は大切」と唱える没論理的な科学研究至上主義からはじまり、自然科学の進歩と社会の進歩と同一視するそのような科学観であり、科学性善説とでも言えるものであった。

しかし、たとえば、山本義隆は「ランダウをめぐる」(『物理学者ランダウ・スターリン体制への叛逆』みすず書房、2004)において「科学研究の営みが軍事を含む大きな政治の枠内におかれている状況下では、あるいは生命科学が人間の尊厳を損ないかねないところまできている現在、研究活動にはきわめて厳格な倫理が要求されているのであり、研究をすすめる業績をあげることで唯一絶対の価値では最早ない。

研究者が流れに抗して真に主体性を

回復できるとするならば、それは科学のおかれている状況を批判的に捉えなおし、場合によっては実際に研究を拒否する覚悟を持つことによってでしかないのである」(312頁)と述べているが、『ゴジラ』(1954)の芹沢博士は、空想科学映画のなかであるとはいえ、それを実際にやってのけたのである。

佐藤が言うように科学者、芹沢大助は、無責任なのではない。むしろ、「何があっても科学研究を進めることは、善である」というような戦後民主主義の科学観のなかにある科学研究至上主義を批判的にとらえている(おそらくこの科学観は、監督の本多猪四郎の科学観を反映している)という点で60年代の科学批判の思想を先駆的に先取りしている側面があるのである。実際にこうした科学研究至上主義が問題にされ始めるのは、1968年の東大全共闘運動あたりからであるが、大衆向けの娯楽空想科学映画とはいえ、それは、それから15年近く前の『ゴジラ』(1954)において問題にされ

ていたのである。

おわりに

科学史家のトーマス・クーンは、ベーコンの科学という概念を提出した。

ベーコンとは17世紀英国で活躍したフランス・ベーコンのことで近代西欧のベーコンの科学は、実験科学を中心とした科学である。

自然科学というが、「自然」というよりは日常ではありえない非日常的な状態から導き出される側面をベーコンの科学は持っている。と言っても19世紀のベーコンの科学は、まだ許容範囲内であった。

しかし20世紀の原子核科学は、「不自然」「非自然」科学、「非日常的」科学、「作為的」「人為的」科学であり、ウルトラベーコンの科学という側面を持つものであり、人類の運命をも左右しかねない巨大な力を持っている。ゴジラはこのウルトラベーコンの科学に基づいたテクノロジーによって生み出されたとてもないモンスターである。

原子力発電をやってはならないのは、原子力テクノロジーが、「不自然」であり人体に害を与える放射性廃棄物を出すという不完全性を免れていないからである。

最後に、第五福竜丸が被曝した時の外務大臣・岡崎勝男氏に対する指摘で本稿を締めくくりたい。岡崎勝男は、吉田茂内閣の外務大臣であり第五福竜丸がビキニ環礁で1954年3月1日に被曝したとき「私たちはアメリカの水爆実験に協力する」と述べて多くの日本人の憤激を買っていた。岡崎は1937年、当時の南京の日本総領事に駐在して、それらの記録を東京の外務省に報告していた外交官の一人であった。岡崎は、戦後東京裁判に関連した国際検察局の尋問調書のなかで、南京安全区国際委員会からほとんど毎日のように報告がなされ、外務省出先機関は、その報告の概要を本省に打電し、報告そのものも本省に郵送したと述べている。岡崎は戦後になってから「懐かしき中国」(『文藝春秋』臨時増刊、1949年12月)という一文を書いて

いる。

戦前に英米を鬼畜と呼びアジアを英米の帝国主義から解放するというのが、大東亜戦争遂行のための大義名分であった。岡崎もまたこの大義名分にのっかり中国侵略に関与していた。戦前に鬼畜英米と言っていた人間が、戦後日本において対米従属の代表的人物となっている現実を私たちは目撃する。世界史上、これに類する転換はなかなか見つけることは難しいだろう。先述の占領史家、笹本征男氏は『米軍占領下の原爆調査 原爆被害国になった日本』(新幹社、1995)のなかでその問題を詳しく考察している。大石又七氏らを苦しめたのは、岡崎勝男に象徴される対米従属の外交であり、戦後日本の重要協定、日米行政協定(日米地位協定の前身)に調印したのも岡崎である。現在の日本においても基本的にはこのような対米従属の社会構造は変わっていない。

2021年には、大石又七氏が、そして2022年には宝田明氏がこの世を去った。第五福竜丸やゴジラにとっ

て重要な人物がいなくなってしまったのである。しかし、ゴジラvs正力松太郎+中曽根康弘+岡崎勝男+安倍晋三+岸田文雄+ホリエモン+十倉雅和+etc.という闘いは、まだまだ終わることはない。

(2023年9月7日・公開講演会)

筆者略歴(やまぐち・なおき)

1991年、東北大学理学部物理学科卒業、東北大学大学院修了。2003年から北京大学科学と社会研究センターに研究留学。2008年、北京日本大学術交流会を組織し北京で347回実施する。専門は、近代日本植民地科学史、近代日中科学史、現代中国科学技術社会論など。共著に『在中日本人108人のそれでも私たちが中国に住む理由』(阪急コミュニケーション、2013)、『日中関係は本当に最悪なのか―政治対立下の経済発信力』(日本僑報社、2014)など。